

農作物技術情報 第6号の要約

平成25年 8月29日発行
岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部

作目	技術の要約
水稲	<p>生育状況:刈り取り始めの目安となる日平均積算気温が 950℃に達する日は、平年より 2 日程度早まると予想される。収穫時期は日没が早まるので、余裕ある作業計画で適期に収穫すること。</p> <ul style="list-style-type: none">○コンバインや乾燥調製施設の点検、整備を早めに行うこと。○完全落水は出穂後 30～35 日後とすること。(品質低下の防止)○刈取り適期の判定は、穂の黄化初率で 80～90%を目安に、適期に収穫すること。○冠水や倒伏等により穂に泥が付着した場合、玄米を土で汚さないよう作業機をこまめに清掃すること。○籾の乾燥は二段乾燥を心がけ、玄米水分 15%以下に仕上げること。
畑作物	<p>大豆:平年並～やや早めの開花。7月の長雨による影響から湿害や茎疫病の被害が見られるほ場があり、生育量は全般に平年並みから平年をやや下回っている。マメシクイガの防除適期は 8 月下旬から 9 月上旬。薬剤が莢によく付くように散布すること。</p> <p>小麦:播種適期を逃さない作業計画を。排水対策は必ず実施すること。播種は土壌条件が整ってから行い、出芽・初期生育を確保すること。</p>
野菜	<p>生育状況:施設果菜類の生育は、全般に着果負担や日照不足の影響により草勢低下が見られている。露地果菜類は定植後の干ばつ、日照不足の影響、成り疲れにより、草勢が低下している圃場が見られる。雨よけほうれんそうの生育は概ね順調だが、高温による生育停滞やしおれ、枯死等が見られる。レタス・キャベツは病害の発生により出荷量が少ない傾向であり、ねぎは概ね順調な生育となっているが土寄せ作業が遅れている。</p> <p>果菜類</p> <p>【雨よけトマト】【雨よけピーマン】今後も気象経過に応じたハウスの適切な温湿度管理で草勢維持をはかるとともに、障害果の発生防止対策を行う。灰色かび病等の病害の予防やタバコガ類等の防除を徹底する。</p> <p>【露地きゅうり】草勢維持を重点に、採光性を考慮した摘葉、不良果の早め摘果による着果負担の軽減、速効性の追肥や葉面散布を行う。病虫害防除は褐斑病、炭そ病、べと病を重点に行う。</p> <p>雨よけほうれんそう:秋まき用品種への切替を適切に。気温が下がっても日中は換気をしてべと病を予防する。土壌病害が多発した圃場では作付終了後の土壌消毒も可能。コナダニ、シロオビノメイガ等害虫の防除対策を徹底する。</p> <p>キャベツ、レタス等:適期収穫に努めるとともに、圃場排水の確認を行う。</p>
花き	<p>りんどう:圃場の過湿による病害が多くなっているので排水対策を再度確認する。ハダニ類、アザミウマ類など病虫害の防除を徹底し、良品出荷に努める。</p> <p>小ぎく:白さび病、オオタバコガ、ハダニ類、アブラムシ類の発生が多くなっている。彼岸向けの収穫に向けて防除を徹底する。また収穫前に翌年用の母株を選抜すること。</p>
果樹	<p>生育状況:りんごの果実生育は平年並みまで回復、早生品種の果実品質は、硬度、でんぷん指数は平年並みから高め、糖度は平年並みとなっている。</p> <p>りんご:早生種の適期収穫とすぐりもぎの徹底を。中晩生種の見直し摘果を実施すること。</p> <p>ぶどう:品種ごとの適期収穫を励行すること。</p>
畜産	<p>飼料用トウモロコシ:生育は概ね平年並。収穫時の基本技術(黄熟期収穫、原料の細切、十分な踏圧、早期密封)を励行する。</p> <p>乳用牛・肉用牛:暑熱の影響の緩和対策を継続し、体力の回復を図る。</p>

詳細については「いわてアグリベンチャーネット」をご覧ください。 <http://i-agri.net> (「いわてアグリ」と検索すると上位に表示されます)

○農作業安全: 事故のないよう、農作業安全に十分留意してください。

○農薬適正使用: 使用前に必ずラベルを確認し、使用基準の厳守と飛散防止を心がけてください。

次号は平成25年9月26日発行の予定です

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 水稻

発行日 平成25年 8月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

刈り取り始めの目安となる日(日平均積算気温が950℃に到達する日)は平年より2日程度早まると予想されます。収穫時期は日没が早まりますので、余裕のある作業計画で、適期に収穫しましょう。

- コンバインや乾燥調製施設の点検、整備は早めに行いましょう。
- 完全落水は出穂後30~35日後としましょう。(品質低下の防止)
- 刈取適期の判定は黄化率で80~90%を目安に、適期に収穫しましょう。
- 冠水や倒伏により穂に泥が付着すると、調製時に玄米表面を汚す等、外観品質を損なう恐れがあります。作業機をこまめに清掃し、品質低下を防ぎましょう。
- 籾の乾燥は二段乾燥を心がけ、玄米水分15%以下に仕上げましょう。

1 生育状況

県全体の出穂期は8月8日と平年より1日遅かった(表1)。出穂後は好天で経過しており、登熟は順調に進んでいます。

表1 水稻の地帯別出穂時期

各農業改良普及センター調べ

農業地帯	出穂時期(月/日)								
	本年			平年			平年差(日)		
	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期
北上川上流	8/5	8/8	8/12	8/3	8/7	8/11	2	1	1
北上川下流	8/5	8/8	8/11	8/4	8/7	8/11	1	1	0
東部	8/5	8/8	8/12	8/5	8/8	8/12	0	0	0
北部	8/5	8/8	8/12	8/4	8/7	8/11	1	1	1
県全体	8/5	8/8	8/11	8/4	8/7	8/11	1	1	0

注) 1 平年値は平成14年~24年(15年を除く)の10か年の平均値

2 始期、盛期、終期は各々地帯で概ね10%、50%、90%の水田が出穂期となった日

2 気象経過

8月第2半旬以降、気温は平年より高く経過しています(図1)。

東北地方の1ヶ月予報(仙台管区気象台8月23日発表)では、向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおり。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いです。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

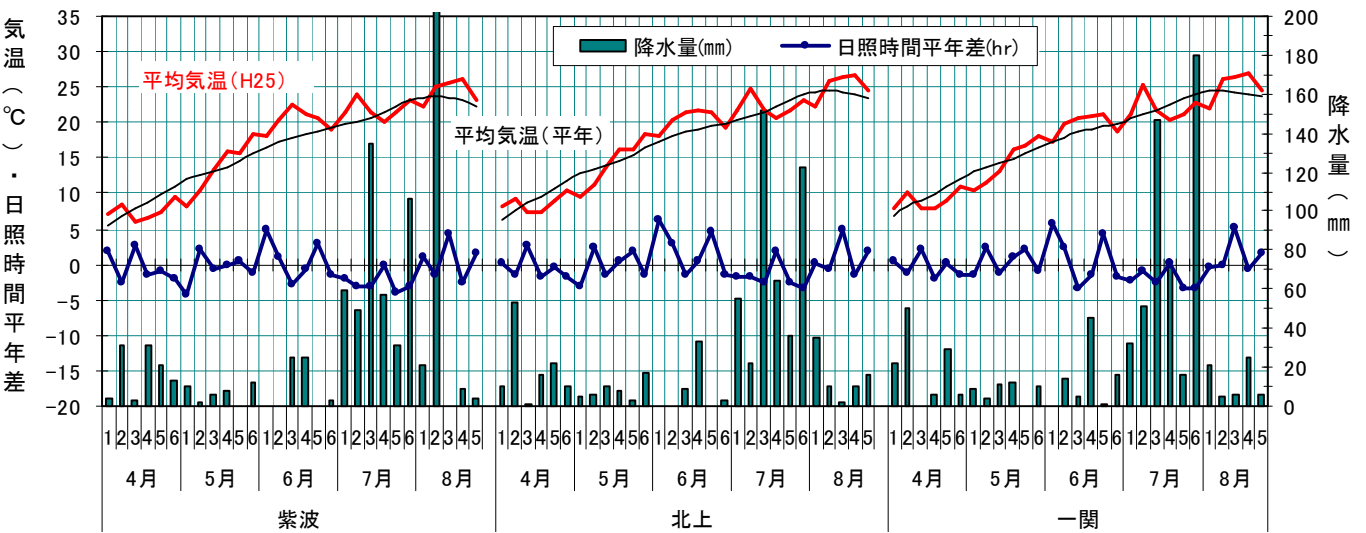
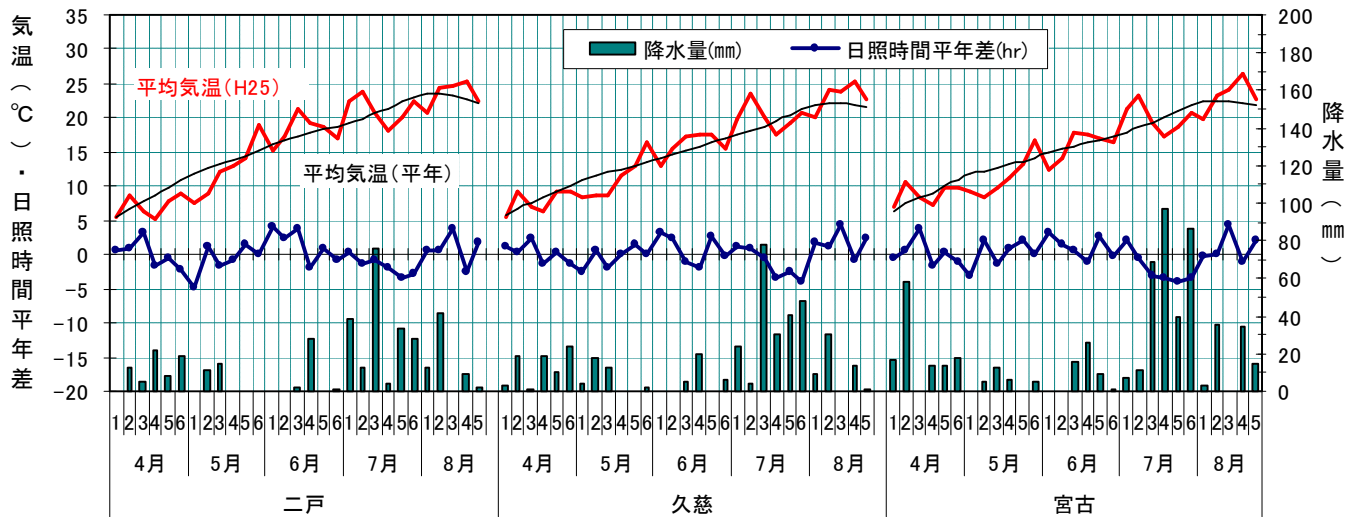


図1 半月別気象経過図（4月第1半月～8月第5半月）
（上段；二戸・久慈・宮古 下段；紫波・北上・一関）

3 登熟を低下させない水管理

登熟期の高温は品質低下の原因となるので、登熟を低下させない水管理を心掛けましょう。

登熟期間の水管理は食味、品質及び収量に大きく影響します。根の活力を維持するため間断かんがいをを行い、田面が湿っている程度の水分を保つような水管理を行ってください。

落水が早すぎると収量や品質の低下につながります。以下を目安に落水しましょう。

- ◆ 排水が悪く地下水位が高い水田・・・出穂30～35日頃
- ◆ 排水のよい水田・・・出穂35～40日頃

*台風、大雨等で浸冠水の恐れがあるときは、水尻を開けて排水を促します。浸冠水した場合は、葉先を早く出すことが重要ですので、速やかな排水に努めます。

ただし、稲体が水分を失いやすい状態にあるため、田面を急激に干さないようにしてください。

4 適期刈り取りの励行

適期刈り取りは高品質生産のために重要です。黄化初割合80～90%に達したら刈り取りを行って

ださい。今年も新米の安全性を確認するための放射性物質調査を全県で実施します。カントリーエレベーター、ライスセンターをご利用の方は施設の稼働時期を確認のうえ刈り取り計画をたてましよう。

◆刈り取り適期の予測

刈り取り適期は出穂期からの日平均気温の積算による方法で予測します。品種ごとに刈り取り適期の目安となる積算気温が定められています（表2）。

本年の各地域での**刈り取り始めの目安**となる日（出穂後の日平均積算気温が950℃に到達する日）は平年より2日程度早まると予測されます。コンバイン、乾燥調整施設の清掃、点検整備は早めに行い、刈り取りを行うための準備を進めましよう。

表2 主要品種の積算気温による刈り取り適期の目安

品種名	刈り取り適期の積算気温
ひとめぼれ	900～1,050℃
どんぴしゃり	950～1,050℃
あきたこまち	950～1,100℃
かけはし	950～1,050℃
いわてっこ	950～1,050℃
ササニシキ	1000～1,150℃
ヒメノモチ	950～1,050℃
もち美人	950～1,050℃

表3 各地域の出穂期と日平均積算気温950℃到達日の予測

農業地域	出穂期						刈り始めの目安 出穂期～日平均気温積算温度950℃到達日(月/日)						使用 アメダス ポイント
	本年			平年			出穂始期～		出穂盛期～		出穂終期～		
	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期	本年	平年	本年	平年	本年	平年	
花巻	8/6	8/9	8/12	8/4	8/7	8/10	9/16	9/18	9/20	9/22	9/25	9/26	花巻
北上	8/7	8/11	8/14	8/5	8/9	8/12	9/17	9/19	9/23	9/25	9/27	9/29	北上
遠野	8/2	8/5	8/9	8/3	8/6	8/10	9/14	9/15	9/18	9/19	9/24	9/25	遠野
西和賀	8/7	8/10	8/14	8/4	8/8	8/12	9/22	9/23	9/27	9/28	10/3	10/4	湯田
盛岡	8/8	8/10	8/14	8/4	8/7	8/12	9/23	9/22	9/26	9/25	10/3	10/1	雫石
紫波	8/3	8/8	8/12	8/2	8/5	8/10	9/14	9/16	9/21	9/23	9/27	9/29	紫波
八幡平	8/2	8/7	8/10	8/2	8/6	8/10	9/15	9/17	9/22	9/24	9/26	9/29	岩手松尾
奥州	8/4	8/8	8/11	8/3	8/6	8/10	9/13	9/16	9/19	9/21	9/23	9/25	江刺
一関	8/6	8/7	8/10	8/4	8/6	8/9	9/15	9/17	9/17	9/18	9/21	9/22	一関
大船渡	8/4	8/7	8/12	8/4	8/8	8/13	9/15	9/16	9/18	9/20	9/25	9/27	大船渡
釜石	8/5	8/8	8/11	8/4	8/7	8/11	9/15	9/18	9/19	9/22	9/23	9/26	釜石
宮古	8/6	8/9	8/12	8/4	8/7	8/11	9/19	9/21	9/23	9/25	9/27	9/29	山田
岩泉	8/6	8/8	8/11	8/4	8/8	8/12	9/20	9/22	9/24	9/26	9/30	10/2	岩泉
久慈	8/6	8/9	8/12	8/4	8/8	8/12	9/19	9/22	9/23	9/26	9/28	9/30	久慈
二戸	8/3	8/6	8/11	8/3	8/6	8/10	9/15	9/17	9/19	9/21	9/27	9/28	二戸
軽米	8/5	8/8	8/11	8/4	8/7	8/11	9/19	9/21	9/23	9/26	9/28	9/30	軽米
北上川上流	8/5	8/8	8/12	8/5	8/8	8/12	9/17	9/18	9/23	9/24	9/28	9/29	
北上川下流	8/5	8/8	8/11	8/3	8/7	8/11	9/16	9/18	9/20	9/22	9/25	9/26	
東部	8/5	8/8	8/12	8/5	8/7	8/13	9/17	9/19	9/21	9/23	9/26	9/28	
北部	8/5	8/8	8/12	8/7	8/9	8/12	9/17	9/20	9/21	9/24	9/27	9/29	
県全体	8/5	8/8	8/11	8/4	8/7	8/11	9/16	9/18	9/21	9/23	9/26	9/28	

* 各地域の代表アメダス地点について、8月26日までは実測値、以降は平年値を使用して950℃到達日を予測した。
 * 出穂始期：10%出穂、出穂盛期：50%出穂、出穂終期：90%出穂した日
 * 平年は、H14～H24（H15除く）の10か年の平均値

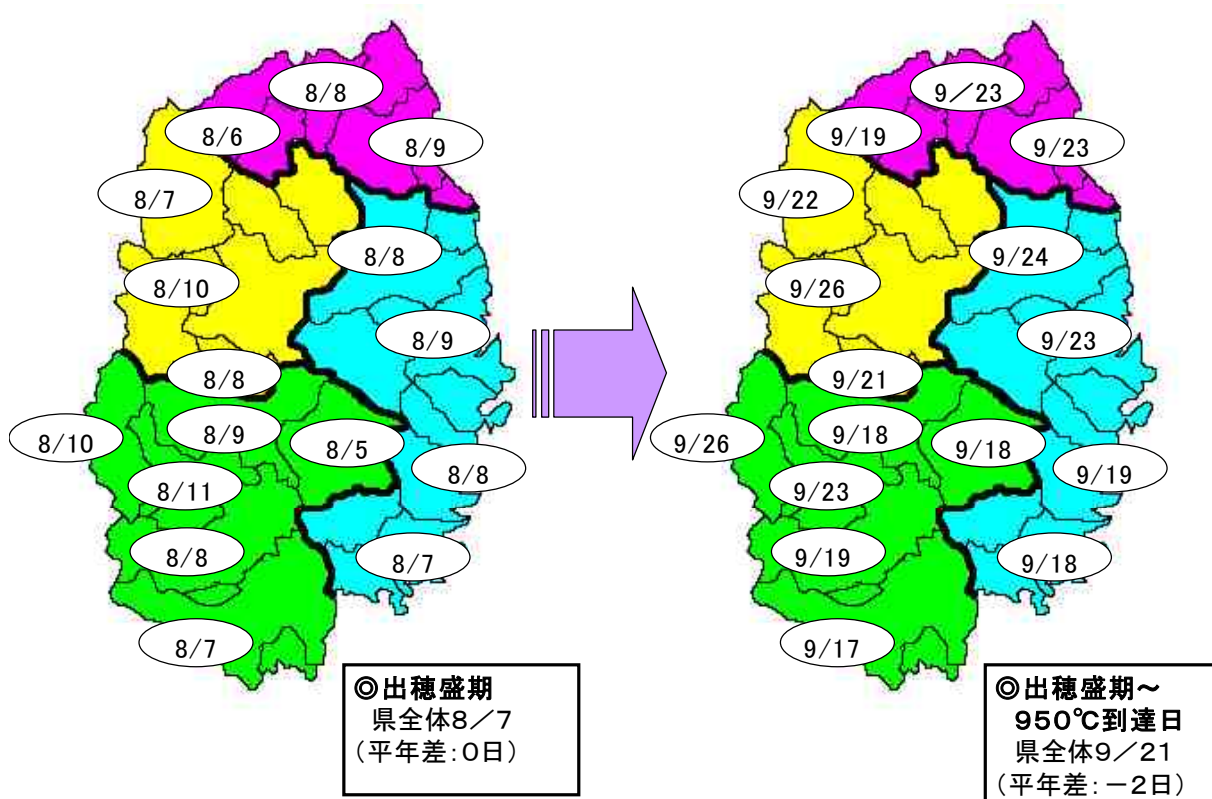


図2 各地域の出穂盛期から日平均積算気温950°C到達日(予測)

※ 各地域の代表アメダス地点の日平均気温の積算(8/26までは実測値、以降は平年値を使用)

◆刈り取り適期の判断

出穂からの登熟積算気温が950°Cに近づいたら、

- 籾の黄化割合を随時チェックし、
- 籾の黄化割合が80~90%となったら刈り取りを行ってください。

◆刈り取り適期判断等の留意点

(1) 積算気温は目安にとどめる

積算気温による方法は栽培法や日照時間によりズレが生じる場合があります。最終的には、籾の黄化割合(80~90%が黄色で、穂基部の1割程度が緑色)を基本に刈り取りの判断をします。

(2) 籾水分の確認

コンバイン収穫では、作業開始前に水分計を用いて籾の水分状態が20~25%にあることを確認しましょう。

(3) 水田内で出穂のばらつきが大きい場合

1枚のほ場内でも出穂のばらつきが見られます。水口などで登熟が大幅に遅れているような場所は、刈り分けして品質低下を避けてください。

(4) 倒伏した場合

台風や大雨等により倒伏した場合は刈り分けを行い、土が付着した籾や青未熟粒等の混入を避けてください。

(5) テスト籾すりによる品質チェック

着色粒は出穂後の日平均積算気温が750°C頃から出始めることから、随時テスト籾すりを行い、刈取適期を判定してください。

5 乾燥・調製の留意点 仕上げ水分は15.0%以下を徹底!!

(1) 胴割れ粒の発生防止

毎時乾減率（1時間当りの水分低下）を0.8%以下とし、送風温度に十分に注意してください。急激な乾燥を避け、また、過乾燥にならないよう注意が必要です。
水分のバラつきが大きい場合は、水分測定をこまめに行い、籾水分18%の時に一旦乾燥機をとめて放冷・循環常温通風し、その後仕上げ乾燥して籾水分の均質化を図ります（二段乾燥）。
自然乾燥においては、掛け替えを行うなど乾燥に努め、乾燥期間は2週間以内としてください。

(2) 籾すり時の肌ずれ、脱ぶの防止

玄米水分15.0%以下の適正水分で籾すりを行います。（肌ずれ米の防止）
ゴムロールのすき間は、籾の厚さの約1/2（0.5～1.2mm）が標準です。
脱ぶ率は条件により変化するので、85程度になるようロール間隔を調整します。

(3) ライスグレーダー

出荷製品となる玄米は、L L（1.9mm）の篩い目使用を基本とし、整粒歩合80%以上となるよう努めましょう。

6 異品種混入の防止

現在、全国的に異品種の混入が問題となっており、DNAの解析により米一粒からでも品種の判定ができます。異品種の混入が発生すると、品種名の表示ができなくなり、そのまま米を出荷すると、JAS法表示違反となるばかりか、産地全体のイメージを損ねることになります。

このような事態を回避し産地の信頼を確保するため、異品種混入を防ぐ管理に心掛けましょう。

特に、コンバイン、運搬機、乾燥機や籾摺機など収穫・乾燥・調製機械や施設内には、前年に収穫した籾等が残留している可能性があります。収穫が始まるまでにこれらの機械や施設の点検・清掃を行い、異品種の混入を未然に防止してください。

7 農作業安全

収穫時期は日没が早まるので、例年、農作業事故の発生が多くなります。余裕のある作業計画とし、農作業安全に努めましょう。また、作業機に反射シールを貼るなどして交通事故防止にも努めましょう。

次号は9月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・地域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 畑作物

発行日 平成25年 8月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ **大豆** 平年並から平年よりやや早い開花となりました。7月の長雨による影響から湿害や茎疫病の被害が見られるほ場があり、生育量は全般に平年並みから平年をやや下回っています。
マメシンクイガの防除適期は8月下旬から9月上旬です。薬剤が莢によく付くように散布しましょう。
- ◆ **小麦** いよいよ26年産小麦栽培が始まります。播種適期を逃さないよう作業計画を立て、排水対策を必ず実施しましょう。
播種は土壌条件が整ってから行い、出芽・初期生育を確保しましょう。

大豆

1 生育概況

開花期は、県北部では平年並み、県南部では平年よりやや早まりました。7月の長雨による影響から湿害や茎疫病の被害が各地域で散見されました。8月に入り生育は回復してきておりますが、生育量は全般に平年並みから平年をやや下回っています。

2 病害虫の防除

マメシンクイガの防除適期は、県中北部で8月第6半旬、県南平坦部で9月第1半旬です。ただし、ピレスロイド系薬剤を使用する場合は、上記より1半旬早め(県中北部で8月第5半旬、県南平坦部で8月第6半旬)に散布すると、より高い防除効果が得られます。

紫斑病の防除適期は、若莢期(開花後20日頃)～子実肥大期(開花後40日頃)となります。

いずれも薬剤が莢によく付くように散布(生育が旺盛な場合は登録の範囲内で散布水量を増やす)しましょう。

3 手取り除草の実施

雑草は収穫時に汚損粒の原因となります。また、次作の発生源となりますので、大型雑草がある場合は種子をつける前に除草を行いましょう。

4 台風対策

台風の影響を受けやすい時期になります。土壌表面の排水を促進するため周囲溝や排水口などを点検・補修し、土壌表面水を速やかに排水できるようにしておきましょう。

小麦

1 排水対策

水稲の刈り取り作業と小麦の播種作業が競合することにより播種適期を逃してしまうことが心配されます。排水対策を早めに実施し、ほ場を乾かしておきましょう。

水稲の刈り取り後、小麦を作付けするほ場については、地表水の速やかな排水を促すため、できるだけ早く額縁明渠を設置しましょう。→必ず排水路につなげて下さい（水尻は大きく掘り下げ、フリードレン下部から排水するようにしてください）。

ほ場内明渠は、播種後に実施することも可能です。十分な準備ができない場合、播種後の施工も想定しておきましょう。

2 プラウ耕

水田ではロータリ耕が一般的ですが、小麦栽培では深耕のためにプラウ耕が必要になることもあります。ただし、深耕が難しい場合もありますので、あらかじめ作土や耕盤の深さなどを調査し、不良な重粘土ややせた下層土が作土に混入することを避けるなど、十分に検討してください。

表1 プラウ耕とロータリ耕の利点と欠点

	プラウ耕	ロータリ耕
利点	<ul style="list-style-type: none"> ・深耕、砕土による透排水の改善 ・有効土層確保（15cm以上） ・わら等のすき込みが容易 ・雑草の種子や塊茎の低減 	<ul style="list-style-type: none"> ・砕土、整地を兼ねた省力作業 ・小型トラクタで対応可能
欠点	<ul style="list-style-type: none"> ・20ps程度のトラクタでは対応が難 ・耕起後の整地作業が必要 ・一気に深耕すると肥培管理が難 	<ul style="list-style-type: none"> ・耕深が10～12cm程度と浅い ・耕盤ができ、排水不良、土壤構造が緻密化 ・湿田では土を練ってしまう ・有機物のすき込みがしにくい

3 砕土・整地

深耕を行った場合は、大きな土塊を砕くため、砕土・整地作業を十分に行う必要があります。土塊が多いと播種精度が落ち、発芽が劣るなどの問題が生ずるので、水稲から転換後1～2年は砕土・整地をできるだけ丁寧に行いましょう。

特に砕土の良否は発芽に大きな影響を及ぼすため、一般的に地表部10cm層の砕土率（粒径2cm以下の土塊の割合）を70%以上にする必要があるとされています。砕土作業は、ハロー耕（ツースハロー、ドライブハロー、バーチカルハロー）やロータリ耕が効率よく行えますが、作業時の土壤水分によっては砕土性が劣る場合があります。砕土作業はプラウ耕の方向に対して直角か45°の角度で行い、砕土後はほ場を均平にするため整地します。ロータリ耕のあとは土壤が水分を含みやすく、降雨があると乾きにくくなるため、播種直前に行うようにしましょう。

また、アップカットロータリを用いると、表層の砕土率が高く、下層は粗い二層構造の土壤を形成し、有機物の埋め込み性にも優れ、その後の播種作業も楽に行うことができます。

表2 水田転換畑（初年度）と普通畑における砕土率と発芽率（昭和42年；東北農試）

水田転換畑		普通畑		備 考
砕土率 (%)	発芽率 (%)	砕土率 (%)	発芽率 (%)	
64	77	77	83	<ul style="list-style-type: none"> ・土壤型：多湿黒ボク土 ・耕起、砕土：プラウ耕、ロータリ耕 ・品目：とうもろこし ・播種法：コーンプランター播種
61	72	74	84	
57	70	71	86	
49	67	66	84	
45	68	57	78	

4 適期播種と播種量、播種方法

播種期が遅くなると、年内に確保できる茎数が少なく、穂数不足による減収や、根張りが少ない

ため凍上害にあうことが多くなります。特に、県北部では播種晩限をすぎるほど減収程度が大きくなるので、適期播種に努めましょう。

品種別の播種量と目標株立数を参考に、播種が遅れた場合には播種晩限から 1 週間遅れるごとに播種量を 1 割ずつ増やしましょう。また、やむをえず萎縮病類が発生したほ場に今年もナンブコムギを作付ける場合には、播種量は標準の 3 割増とし、100～120 株/㎡の株立数を目指しましょう。

ドリルシーダーを用いてドリル播き（密条播）する場合は、播種量の調整を行い、施肥機がセットされている機械では播種同時施肥を行います。また、播種深度は 3～5cm 程度を目標とします。播種深度が深すぎると、出芽のバラツキや出芽率が低下します。逆に播種深度が浅すぎると、凍上害や鳥害、除草剤の薬害などが生じやすくなるので注意しましょう。

ブロードキャストで種子を散播する場合は均一散播に心がけ、覆土はパディハローやロータリなどを用いて浅く（5cm 深程度）攪拌、覆土を行います。

表 3 県内の地帯別播種適期

地 帯	播種期（月．日）		適期日数 （日間）
	早限	晩限	
高標高地	9.15	9.25	11
県北部	9.15	9.30	16
県中部及び沿岸北部	9.20	10.5	16
県南部	9.25	10.20	26

表 4 品種別の播種量と目標株立数

品 種 名	播種量 (kg/10a)		目標株立数 (株/㎡)	千粒重 (g)
	ドリル播	全面全層播		
ナンブコムギ	6 程度	8 程度	75～120	41
ネバリゴシ	6～8	8～10	130～170	37
ゆきちから	6～8	8～10	120～160	39
ファイバースノウ (大麦)	6～8	8～10	130～170	38

注) 播種粒数に対して株立率を 80%（全面全層播は 64%）として求めた。

●萎縮病対策

岩手県内全域で萎縮病類に汚染されているほ場が目立ちます。抵抗性の高い品種（ゆきちから等）の導入が有効です。ナンブコムギを作付けする場合は、発病ほ場では安定した収量確保が難しいので、ほ場の変更を検討しましょう

萎縮病類は土壌伝染するので、農業機械、農機具および作業者の靴の土壌をよく洗い、汚染土壌を他のほ場に持ち込まないようにしましょう。また、やむをえず作付けする場合、「播種晩限」より遅れない範囲で播種期を遅らせることで、早期感染を防ぎ被害の軽減につながります。

萎縮病対策には冬期播種も有効ですが、排水条件が良く雪解けの早い地域でないと生育量が確保できないことがあります。実施にあたっては十分注意してください。

5 除草剤処理

除草剤をよく効かせるためには、

- ・ 散布のタイミングを逃さないこと。
- ・ 砕土・整地を丁寧に行うこと。
- ・ 土質によって薬量が変わる場合があるので、ラベルをよく読むこと。

が重要です。

過湿条件では薬害が発生する危険があるので散布を避けましょう。また、輪作や周囲の草刈りなど耕種的な防除を併せて実施し、総合的な雑草防除を行いましょう。

前年にイタリアンライグラスが多発した圃場では、耕起前（イタリアンライグラス出芽後）に非選択性茎葉処理剤を散布し、その後耕起・播種する方法が有効です。

次号は9月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 野菜

発行日 平成25年 8月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 施設果菜類 草勢維持と障害果の発生防止
- ◆ 露地きゅうり 草勢維持、摘葉と病害防除の徹底、台風への備えを万全に
- ◆ 雨よけほうれんそう 適切な品種への切り替え、秋雨・台風への備えを万全に
- ◆ 露地葉茎根菜類 収穫率向上のための適切な管理と病害虫防除

1 生育概況

- (1) トマトの雨よけ栽培は梅雨時期の花落ちや草勢の低下から回復傾向にありますが、収穫果実は小玉傾向となっています。灰色かび病や葉かび病の発生に加え、青枯病、タバコガ類の発生も散見されます。
- (2) ピーマンは収穫ピークを過ぎ、成り疲れによる草勢の低下や高温・乾燥による日焼け果、尻腐れ果等の障害果の発生がみられます。病害虫では軟腐病、タバコガの発生がみられるほか、斑点病、うどんこ病も散見されます。
- (3) きゅうりの露地栽培では収穫ピークを過ぎたところですが、大雨による冠水や成り疲れ等により草勢が低下しているほ場がみられます。また、病害では褐斑病や炭そ病、べと病が増加傾向であり、害虫では一部圃場でハダニやオオタバコガの発生がみられます。施設抑制栽培では生育は概ね順調ですが、褐斑病、うどんこ病の発生が始まっています。
- (4) 雨よけほうれんそうの生育は概ね順調ですが、高温による生育停滞やしおれ、枯死がみられる地域があります。シロオビノメイガが広く発生しているほか、アブラムシ、ヨトウムシに加え、萎凋病、根腐病、立枯病、白斑病の被害も確認されています。
- (5) キャベツは、7月下旬に定植した作型で生育の不揃いが散見され、株腐病等の病害の発生により出荷量が少ない傾向です。コナガ、ヨトウガ、モンシロチョウの被害もみられます。レタスでは、高温等の影響により軟腐病の発生がみられます。
- (6) ねぎは、夏どり作型で収穫が始まっていますが、茎が細めの傾向で、軟白部の確保に苦慮しています。全般的に生育は概ね順調ですが、長雨等の影響により、土寄せ作業が遅れているほ場がみられます。黒斑病、軟腐病、さび病、べと病、ネギアザミウマ、ネギコガ、ネギハモグリバエの発生がみられます。

2 技術対策

(1) 果菜類 (トマト・ピーマン)

ア 施設果菜類

しばらくは気温が高い予報ですので、気温が高いうちは高温対策と十分なかん水管理を継続して下さい。また、今後秋雨前線が活発になるとハウス内の湿度が上がりますので、十分な換気を行うことと、病害虫の防除にはくん煙剤を使用する等、湿度を上げない工夫が必要です。

気温が低下してきたら、施設果菜類では夜間の保温を行います。

イ 雨よけトマト

裂果の発生を抑えるため、土壌水分の急激な変化を起こさないよう少量多回数のかん水管理と

します。ハウス外からの雨水の横浸透にも留意し、ハウス周囲の明きよの点検整備をしましょう。また、早期白熟を防ぐため果実に直射日光が当たらないようにするとともに、裂果軽減を考慮し最低気温が14℃を下回るようになったら保温を行って下さい。

最終摘心時期は収穫打ち切りの日から逆算して決めますが、10月末まで収穫する場合は、9月上旬頃が目安となります。開花花房の上の葉を2枚残して摘心すると、放任するよりも果実の肥大が良くなります。

病害では今後、灰色かび病や葉かび病、疫病の発生が懸念されるので、これら病害に効果のある薬剤を選択し、防除に努めてください。高温期に萎れが多く発生したほ場では、次年度対策のためにきちんと診断を受け、萎れの原因を確認しておきましょう。

ウ ピーマン

施設・露地とも尻腐果等高温による障害果の発生はまだみられていますが、気温の低下とともに黒変果の発生も増えてきます。ハウス栽培では最低気温17℃をめぐり保温を開始し、気象条件に応じて換気を行い、適切な温度管理に努めてください。

病害虫では、降雨後に軟腐病の発生が多くなる時期となります。軟腐病の予防には降雨前後の薬剤散布が効果的です。特に、タバコガの食害痕など傷の付いた部分から病原菌が感染しますので、地域の予察情報等を参考にタバコガの防除もあわせて実施して下さい。罹病果を圃場に放置すると軟腐病の伝染源となりますので、速やかにほ場外で処分しましょう。

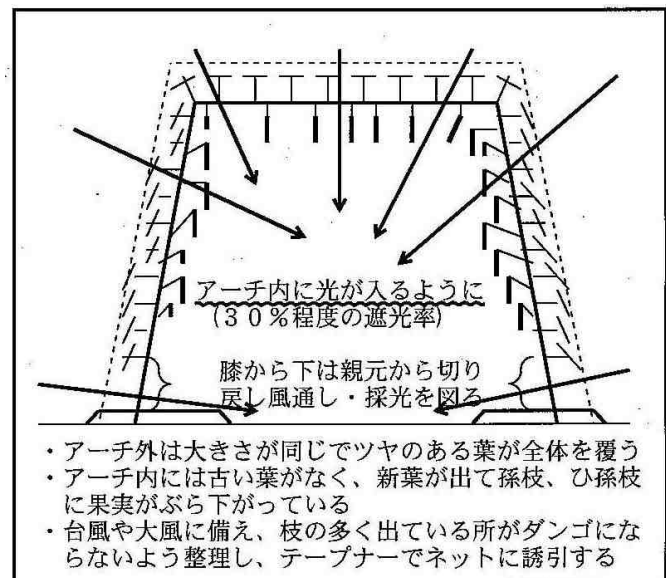
(2) 露地きゅうり

今年は特に草勢が低下している圃場が多いことから、不良果の摘果に努めて草勢回復を図るとともに、摘心はアーチの外側に飛び出しているところを指先で止める程度にとどめます。

摘葉は、生育後半でも太陽光がアーチ内部に十分入り込み、新葉が常に発生するように右図を参考に行います。

さらに、草勢回復には液肥を薄い倍率で葉面散布することも有効です。気温も徐々に低下してきますので、追肥は速効性の資材を利用するようにします。

病害では褐斑病、炭そ病、べと病に効果のある薬剤を中心に選択し、古葉や病葉の摘葉作業と併せながら効果的な防除に努めます。特に、アーチの上部で病害がまん延しないよう丁寧な薬剤散布に努めてください。



(3) 雨よけほうれんそう

秋まき作型に向けた品種の切り替え時期です。品種によっては、高温で徒長したり、気温の低下により生育が大幅に遅れる場合がありますので、各地域で示されている作付品種体系に従い、適期に播種しましょう。

萎ちょう病等の土壌病害が多くみられたほ場では、次年度の対策として土壌消毒を実施しましょう。初夏に土壌消毒する従来の方法以外に、作付終了後の晩秋に土壌消毒を行う方法もあります。具体的な方法については、最寄りの農業改良普及センター等にご相談下さい。

気温の低下や秋雨の影響でハウスを閉める時間が長くなると、べと病が発生することもあります。抵抗性品種を利用している場合であっても、日中は積極的に換気して病害が発生しにくい環境にしましょう。

台風の影響を受けやすい時期になります。屋根ビニールが破損したり、ハウス内に雨水が流

入るのを防止するためビニールの破れの補修、ハウス周りの排水対策を再度確認します。

(4) 露地葉菜類

ア ねぎ

最終土寄せをした後の日数が長くなると葉鞘部のしまりが悪くなる等、品質が低下します。収穫の20～30日前を目安に最終培土を行いましょう。

収穫が近くなってからの病虫害被害は品質の低下に直結しますので、早めの防除を心がけましよう。なお、農薬の使用にあたっては収穫前日数を確認して適切に防除しましよう。

イ キャベツ・レタス

高冷地の定植作業は終了しています。今後は収穫率が向上するように生育中の栽培管理をしっかりと行い、適期収穫により収穫率の向上を目指しましよう。

大雨や長雨の時期になるので、ほ場排水を確認し、降雨後の防除が円滑に行えるようにしましよう。また、収穫終了後の廃棄株や残渣は放置せず、病虫害の発生源とならないように注意しましよう。

ウ アスパラガス

普通栽培および立茎栽培のアスパラガスは、地上の茎葉部に存在している養分が地下部へ徐々に移行する時期となります。これからの追肥は養分転流の妨げになりますので、行わないように心がけましよう。株養成には茎葉部を健全に保つことが重要ですので倒伏防止対策をしている場合には、台風などに備えてもう一度ネットや誘引線の確認を行いましよう。

伏せ込み促成アスパラガスの株養成においても、茎葉部を健全に保つことが収量向上につながります。病害を防除し、倒伏させずに自然に茎葉が黄化するようしましよう。



フラワーネットを利用して倒伏防止しているほ場の例

次号は9月26日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 花き

発行日 平成25年 8月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/>」

- ◆ 共通 排水対策、病虫害防除を徹底し、良品の出荷に努めましょう。
- ◆ りんどう 収穫後、翌年に向けた管理を徹底しましょう。
- ◆ 小ぎく 健全な親株を確保・養成しましょう。
- ◆ 施設花き 施設の風通しなどの環境管理に注意しましょう。

りんどう

1 生育概況

早生種は着蕾以降の長雨、日照不足の影響から昨年よりやや遅れた開花となりました。現在、中生種の出荷が始まっています。

長雨や大雨による圃場の浸水などの影響で茎枯病などによる立枯れや根腐れ症状の発生が多くなっています。また、炭疽病や黒斑病の発生もみられています。害虫ではハダニ類、アザミウマ類が多くなっているほか、リンドウホソハマキの発生が続いています。

今後の重要病害となる花腐菌核病は、例年より遅れた発生となる見込みです。

2 圃場管理

7月以降、降雨が多かったことから圃場の過湿が原因とみられる病害や根腐れ症状の発生が多くなっています。今後も水路などからの水の流入を防止するとともに、長時間滞水しないよう排水路の点検を行うなど排水対策を徹底してください。

また、乾燥気味の場合には、極度に乾燥する前に通路等にかん水します。ただし、長時間水を溜めることや高温時のかん水は避けてください。

3 病虫害防除

(1) ハダニ類

発生が増加傾向にあります。気温の低下に伴い発生は減少しますが、9月中旬頃には越冬成虫が現れはじめ防除効果が低下する(農薬が効きにくくなる)ため、9月上旬までにハダニの密度を下げないように防除を徹底します。葉裏へ十分薬剤が付着するように薬剤散布を行います。

(2) アザミウマ類

収穫後の残花で増え、多発している圃場がみられます。蕾が着色する頃から寄生して花の内部で増殖するので、その時期から防除を徹底し、収穫後の残花の着いた茎部分を折り取ります。圃場周辺の作物や雑草の防除も併せて実施します。

(3) リンドウホソハマキ

現在も発生が続いています。被害がみられている圃場では防除を継続します。また、定植株への被害も見られますので採花年株とあわせて継続して防除します。

(4) オオタバコガ

一部の地域では花蕾の食害がみられています。圃場をよく観察し、発生がみられる場合は効果のある薬剤を選択し防除してください。

(5) 花腐菌核病

菌核にできた子実体(きのこ)から孢子が飛散し、花卉に付着して感染しますが気温の低下に伴い、冷涼地から孢子の飛散が始まります。

各地域での防除情報を参考に適用薬剤での防除を開始してください。



花腐菌核病被害花



株元に形成された子実体



菌核上に形成された子実体

(6) 葉枯病

今年の発生は少なめですが、一部上位葉での発生がみられ始めています。秋季にも拡大する場合がありますので、今後収穫する品種と併せ、収穫終了した品種も防除を継続します。

(7) 黒斑病

降雨が多く、発生が多くなっています。葉表面の傷口から容易に感染しますので、効果のある薬剤を発病前から9月中旬にかけて散布し予防してください。

4 収穫後の管理

- (1) 早生・中生種では、生育の状況により収穫後に窒素成分で3~5kg(10aあたり)を追肥し、株養成に努めます。
- (2) 収穫後の圃場では防除が手薄になり病害虫が多発する場合があります。翌年の発生源となるので、収穫後も防除を継続してください。収穫後の薬剤は葉の汚れへの配慮は不要なのでコスト低減も考慮して選定してください。
- (3) 害虫や花腐菌核病の防除のため、残花のある茎部分を折り取ってください。この作業は株養成のためにも効果的です。また、定植年の株でも開花しますので、できるだけ花を摘み取ります。

小ぎく

1 生育概況

盆需要期の出荷は、若干開花が早まった地域がある一方、遅れた地域もあり地域差がみられました。9月咲き品種は着蕾の肥大も始まり概ね順調な生育となっています。

病害虫では、白さび病、ハダニ類、オオタバコガの発生が多くなっています。オオタバコガのフェロモントラップでの捕殺数は8月下旬以降増加しています。各地域の防除情報を参考に防除を徹底してください。

2 かん水

キクの根は過湿に弱く、冠水した圃場では萎れなどが見られています。今後も降雨が続くような場合、長時間圃場に滞水しないよう排水対策を行ってください。

逆に圃場が乾燥している場合、品質低下や蕾の発達が遅れる原因となりますので適宜かん水を実施します。ただし、長時間水を溜めることや高温時のかん水は避けてください。

3 病害虫防除

(1) 白さび病

7月以降、降雨が続いたことから発生が多くなっています。5～7日間隔で薬剤散布し予防することが基本ですが、既に発生がみられている圃場や降雨が続く場合や散布間隔を狭めて防除してください。

(2) オオタバコガ

県内各地で生長部の食害が確認されています。8月下旬以降、発生が増加しており、第3世代の産卵時期となっていますので、これまでどおり各地域の防除ごよみや防除情報を参考に防除を徹底してください。

(3) ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類の発生もみられていますので防除を継続します。

4 母株選抜・養成

翌年採穂用の母株は、収穫前の選抜を徹底します。特に、えそ病やわい化病の感染株は見つけただい株ごと抜き取り、圃場に残さないようにしてください。また、下葉からの枯れ上がりがみられる株は、土壌病害が原因となっているものもあります。翌年の苗にすることで感染が広がることも考えられるので、枯れ上がりのみられた株の母株への使用は避けます。

残した株は病害虫防除を継続し、茎葉が伸びた場合は適宜台刈りを行います。またマルチ栽培の場合には収穫後すぐにマルチをはがし追肥と土寄せを行います。

施設花き

1 高温対策

施設の開口部を開放して十分に換気できるようにしてください。その際、循環扇等を利用すると効果的です。また、必要に応じて遮光資材を展張し、気温や地温の低下を図ります。ただし、ストック、パンジー等育苗中のものについては徒長を避けるため過度の遮光とにならないよう注意します。

2 ストック

(1) かん水

活着後は2～3日おきにたっぷりかん水します。最初に根を深く張らせることで後半にかん水を控えても萎れないようになり、品質確保につながります。過剰なかん水は立ち枯れ性病害の発生を助長するので、適量かん水を心がけます。

(2) 遮光・温度管理

活着後は速やかに遮光資材を除去し、十分な日照を確保します。ハウスは開放し、気温が上がらないような管理とし、高温による生理障害や品質低下の発生を防ぎます。

(3) コナガ防除

殺虫剤による防除をしますが、抵抗性獲得を避けるため異なる系統の薬剤をローテーションで使用します。ハウスの開口部を防虫ネット（目合いが1mm以下のもの）でふさぐことも効果的ですが、通気性が悪くなり品質低下の原因となる場合があるので、注意します。

次号は9月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報

第6号

果樹

発行日 平成25年 8月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんご 肥大は平年並みまで回復！早生種の適期収穫・すぐりもぎの徹底を！！
- ◆ ぶどう 品種特性が発揮される適期収穫を！！

りんご

1 生育状況

(1) 果実肥大

定点観測地点(表1)の果実肥大(横径)を県平均でみると、いずれの品種も概ね平年並みとなっています。本年は開花が遅れたため、果実肥大調査が始まった6月は平年の60%程度でしたが、乾燥や日照不足、長雨等天候不順の中、摘果が進んだことにより、平年並みまで回復しました。一方、8月に入り気温が高めで推移したことから果実肥大はやや停滞気味です。中晩生種は見直し摘果を実施しましょう。

(2) 果実品質

定点観測地点の「つがる」の果実品質を県平均でみると、硬度及びデンプン指数は平年並み～やや高め(図1、3)、糖度は平年並み(図2)となっています。しかし、地域的なバラツキが見られ、県南部では硬度が低下している地域も見られます。

開花は遅れましたが、これまでの果実品質の状況から収穫期が極端に遅れる可能性は少ないと考えられます。また、昨年は9月までの猛暑の影響により、着色が遅れ、収穫が遅くなった地域も見られました。長期予報によると収穫期の気温は平年並みから高くなる見込みであり、果肉先行で熟期が進む可能性があります。適期の着色管理並びに適期収穫に努めましょう。

表1 りんごの果実肥大状況

(単位:mm)

8月21日時点の生育状況	つがる					ジョナゴールド					ふじ				
	本年(H25)	前年(H24)	平年	前年比(%)	平年比(%)	本年(H25)	前年(H24)	平年	前年比(%)	平年比(%)	本年(H25)	前年(H24)	平年	前年比(%)	平年比(%)
岩手町	79.1	80.0	80.4	99	98	75.2	78.8	79.1	95	95	72.8	73.3	71.8	99	101
盛岡市	77.0	75.0	80.2	103	96	72.5	77.3	78.5	94	92	69.3	75.3	72.8	92	95
紫波町	75.6	78.8	84.2	96	90	70.5	73.3	79.7	96	88	73.8	79.3	74.7	93	99
花巻市	85.5	89.4	81.3	96	105	79.3	78.0	80.1	102	99	74.6	75.4	71.6	99	104
農研センター	82.9	85.1	82.7	97	100	77.2	76.7	79.9	101	97	74.0	74.7	73.6	99	101
北上市	-	-	-	-	-	82.0	84.2	82.6	97	99	77.4	79.3	77.0	98	101
奥州市前沢区	86.3	80.9	83.2	107	104	76.7	79.1	78.9	97	97	76.5	74.1	75.1	103	102
奥州市江刺区	75.7	80.0	80.1	95	95	76.0	77.3	79.6	98	95	65.2	67.4	70.7	97	92
一関市花泉町	93.0	89.4	82.4	104	113	80.3	80.8	78.8	99	102	68.2	70.7	71.2	96	96
一関市大東町	-	-	-	-	-	77.0	80.0	77.1	96	100	73.0	70.7	73.2	103	100
陸前高田市	75.2	81.9	82.7	92	91	80.9	76.2	77.3	106	105	68.9	68.8	71.7	100	96
宮古市	79.3	81.1	80.2	98	99	80.9	83.0	80.4	97	101	75.0	73.4	74.0	102	101
岩泉町	75.0	72.1	80.9	104	93	80.1	80.1	75.7	100	106	71.7	71.0	72.4	101	99
洋野町大野	75.5	84.4	78.2	89	97	72.0	77.2	77.2	93	93	69.0	76.3	69.9	90	99
軽米町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	68.2	70.0	68.9	97	99
二戸市	79.7	84.2	81.1	95	98	73.7	75.5	79.5	98	93	74.2	73.6	73.3	101	101
県平均(参考)	79.7	81.4	81.2	98	98	76.9	78.6	78.9	98	98	71.9	73.2	72.6	98	99

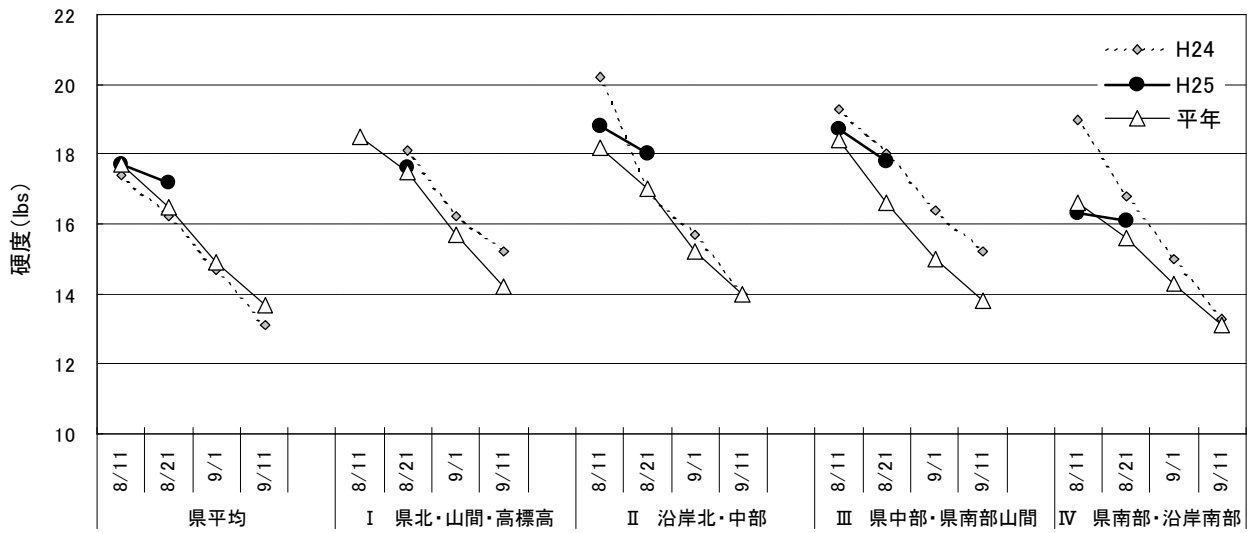


図1 つがるの硬度の経時変化

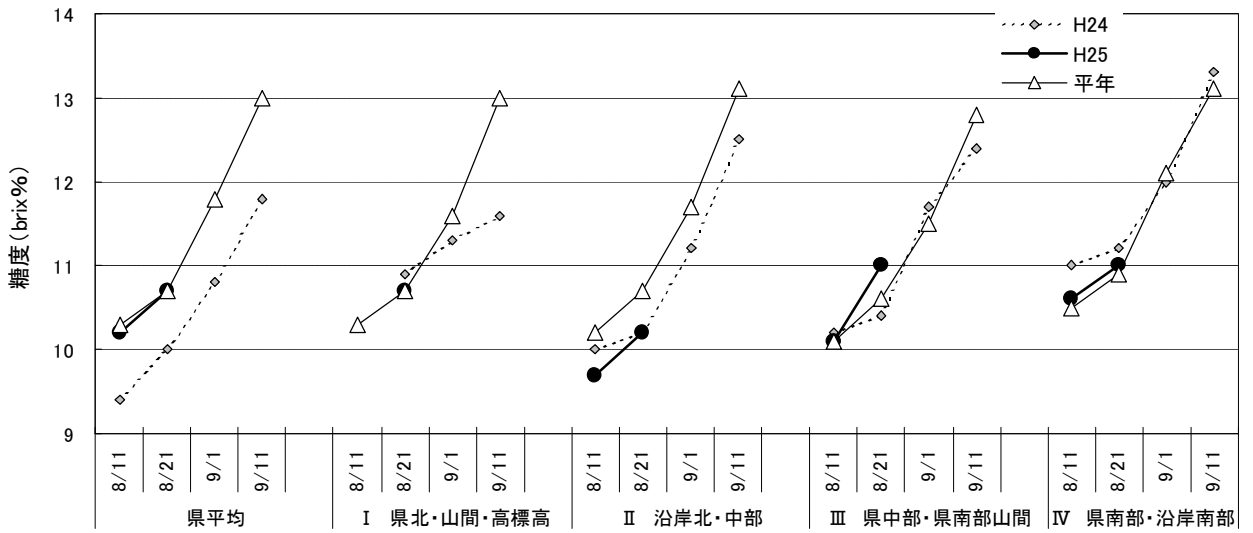


図2 つがるの糖度の経時変化

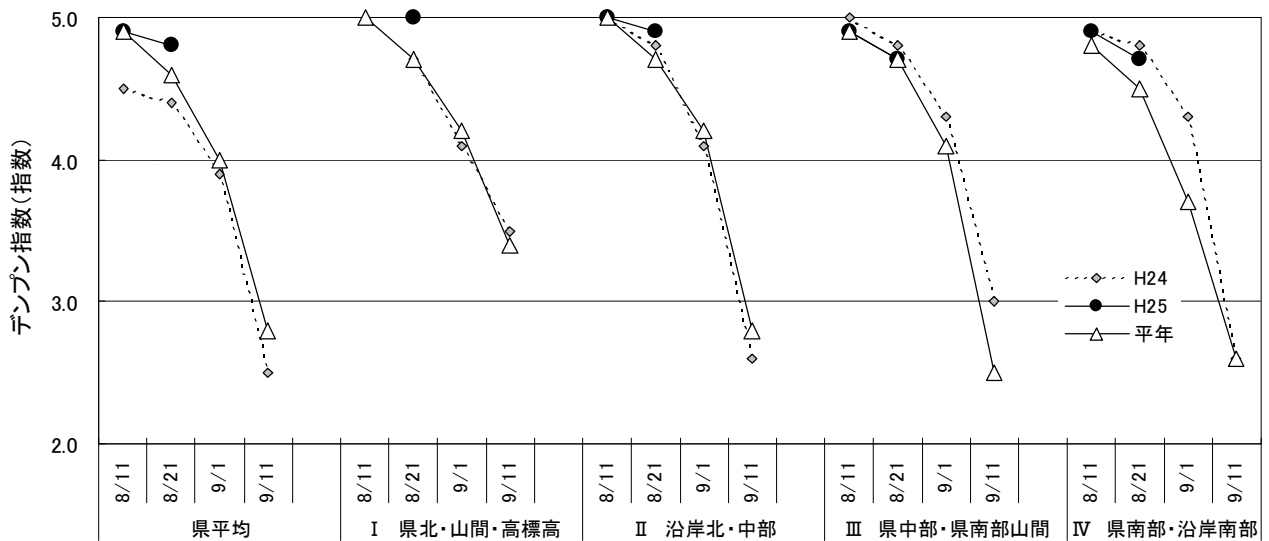


図3 つがるのデンプン指数の経時変化

2 管理作業

(1) 早生種の着色管理

- ア 「さんさ」、「つがる」について作業を実施します。
- イ 1回目の軽い葉摘み終了後、陽光面の着色が進んでから、葉や枝カゲをつくらないように玉回しを収穫まで2～3回行います。玉まわしと同時に適当な強さに葉を摘みます。しかし、果皮に急に直射日光が当たると日焼けが発生しますので、徐々に葉摘みを進めましょう。
- ウ りんごの着色適温は10～20℃です。気温の高い日が続くと、必要以上に葉摘みを強くしても着色は進まないため、過度の葉摘みとならないよう注意します。

(2) 収穫 (表2参照)

- ア すぐりもぎが基本です。特に熟期が不揃いな「つがる」や「きおう」は徹底しましょう。
- イ 「きおう」は、ツル浮き (内部裂果) が発生しやすく、これは正常果よりも早く熟しますので、特に収穫前半はツル浮き果が混入しないよう注意してください。本年は降水量が多く、ツル浮きの発生が多くなる可能性がありますので、特に注意が必要です。
- ウ 「つがる」は、収穫後の果肉の軟化が早く、また、収穫が遅れると果面に油上がりが発生しやすいので、地色に注意して遅取りを避け、収穫後はできるだけ早めに予冷しましょう。
- エ 落果防止剤にストッポール液剤を散布した場合は、散布日から7日以上開けて収穫します。

表2 早生種の収穫期の目安

品種	満開日 起算日数	硬度 (lbs)	糖度 (Brix%)	デンプン 指数	カラーチャート 指数※
さんさ	115日	13.5～14	13～14	2～3	2～3
つがる	115～125日	13～14	12～14	3～3.5	2～3
きおう	115～125日	13～14	13以上	2～3	2.5～3.5

※:さんさ、つがるはふじ地色用、きおうはきおう表面色用を使用

(3) 「紅いわて」の収穫について

ア 満開日起算からみた収穫期の目安について

農業研究センターのこれまでのデータから (表3)、満開日起算日数は135～140日程度で果実品質が一定の基準に達するものと考えられます。研究センターにおける今年の満開日は5月17日であり、満開日起算日数から9月29日となりますが、やや高めの気温が続くと予想されることから、収穫期がこれ以上遅れる可能性は少ないと考えられます。実際の収穫判断は、糖度、でんぷん反応指数、食味で判断します。

イ 収穫期の留意事項

「紅いわて」は着色の良い品種であり、9月になると着色が始まります。しかし、着色のみで収穫を判断し、収穫が早すぎると食味が劣り、品種の評価を落とすこととなりますので、満開日起算日数を目安に食味を確認し総合的に判断してください。「紅いわて」の収穫適期については、現在も農業研究センターで試験中です。最新情報に留意し、適期収穫に努めてください。

表3 「紅いわて」の年次別果実品質 (高接ぎ)

(岩手農研)

年次	満開日 (月日)	収穫日 (月日)	満開日 起算日数	果重 (g)	硬度 (lbs)	糖度 (Brix%)	酸度 (g/100ml)
2012	5月8日	9月19日	134	307	14.4	13.8	0.31
2011	5月16日	9月30日	137	282	12.6	14.4	0.32
2010	5月14日	10月1日	140	283	14.0	13.8	0.28
2009	5月6日	9月18日	135	292	13.0	13.4	0.34
2008	5月2日	9月22日	143	248	16.8	13.3	0.36
2007	5月11日	9月28日	140	261	16.3	15.1	0.36
2006	5月15日	9月28日	136	242	15.0	14.8	0.32
2005	5月14日	10月4日	143	275	13.5	14.0	0.34
2004	5月6日	9月17日	134	280	13.5	14.0	0.40
2003	5月7日	9月28日	144	243	16.6	15.1	0.34
平均	5月10日	9月26日	139	267	14.6	14.2	0.34

3 病虫害防除および気象災害対策

(1) 病虫害防除

今後の気象条件によって、斑点落葉病や褐斑病、ハダニ類等が発生することがあります。予察情報等を参考にして、必要な防除を実施しましょう。農薬を使用するに当たっては、使用基準（倍率、収穫前日数等）に十分注意してください。

(2) 台風対策

これから、台風が多く発生する時期になります。強風で倒木が発生しないよう、防風ネットの設置、支柱との結束を確認してください。また、気象情報に注意し、台風の接近前に収穫を進めるなど、被害を最小限にできるよう対策を講じてください。

(3) 湿害対策

台風に伴う大雨や秋の長雨など、園地内が過湿となった場合、裂果や根部の障害による樹勢衰弱の要因となります。園地内に水が停滞しないよう、溝を掘るなど排水対策を講じましょう。

(4) 日焼け果

今後も気温が高く推移する見込みのため、日焼け果の発生が懸念されます。前号で原因と対策について記載していますので参照ください。

ぶどう

1 生育状況

8月15日時点の定点調査地点における「キャンベル」の果実品質は、果実肥大、糖度は平年より高くなっています(表4)。また、着色も平年より早い状況です。「紅伊豆」の着色は遅れていますが、果実肥大は良好です。しかし、一部に裂果も見られています。

収穫時期は、糖度や酸抜けなどの果実品質を十分に確認してから行いましょう。

2 管理の要点

(1) 収穫

収穫は着色、糖度などの食味に留意しながら、表5の品種ごとの基準糖度に達してから行います。過熟になると商品価値が落ちるので、適期収穫に努めましょう。

早生品種や栽培法によっては、すでに収穫期に入っているものもあると思われますが、収穫に当たっては、農薬安全使用基準の収穫前日数には十分に注意してください。

収穫は、果実温度が低い早朝から午前中に行います。降雨後は、糖度も下がり、輸送中の腐敗も多くなるので避けるようにしましょう。

選果・調整は、果粉を落とさないように穂柄を持ち、未熟果、腐敗果、裂果等を除き、出荷形態に即して房形を整え出荷しましょう。

(2) 裂果対策

収穫直前の急激な土壌水分変化は、裂果の発生を助長します。土壌が乾燥し過ぎないように、こまめな雑草の刈り取り、樹冠下に敷きワラ等でマルチするなどの対策を実施します。また、降雨があった場合には、過剰な水分を早期に排水できるよう、根域の周辺にビニール等を敷く、溝掘り(明渠)するなどの対策を実施しましょう。

「紅伊豆」などの雨よけハウス栽培では、温度が高くなりやすいハウス中央部などで果実の着色不良や果肉の軟化が、裂果や脱粒を引き起こすことがあります。気温が高くなると予想される日は、サイドのビニールを巻き上げる、換気扇を利用する等温度が上がりすぎないように努めます。

表4 ぶどう(キャンベルアーリー)の生育状況(定点調査地点:紫波町赤沢)

	8月15日現在				
	新梢長(cm)	節数(葉数)	房長(cm)	果径(mm)	糖度(%)
本年(H25)	101.1	13.4	16.1	19.9	10.0
前年(H24)	115.7	15.2	15.3	19.8	9.5
平年	136.3	17.6	15.5	18.8	8.2
平年比	74%	76%	104%	106%	122%
前年比	87%	88%	105%	101%	105%

表5 品種別収穫時期の目安

品種	基準糖度	房の状態	備考
キャンベル	14%以上	房全体が黒紫色	
デラウエア	18%以上	着色完了2~3日後	酸抜けが遅い、食味重視
紅伊豆	18%以上	房全体が鮮紅色	過熟果は軟化や脱粒が多い
ハニーブラック	20%	房全体が紫黒色	脱粒少ない
サニールージュ	18%	房全体が紫赤色	脱粒少ない

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 畜産

発行日 平成25年 8月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます

パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 飼料用トウモロコシ 生育状況は概ね平年並みです。トウモロコシの刈り取り適期は黄熟期ですので、遅れないよう、収穫機械やサイロの点検、資材の準備を早めに行いましょう。
高品質なサイレージ調製のため、十分に踏圧し、速やかに密封します。
- ◆ 乳用牛・肉用牛 暑さが続いています。引き続き、暑熱の影響を緩和する対策を継続しましょう。

飼料用トウモロコシ

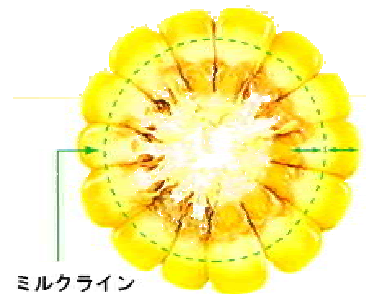
1 刈取適期の判定方法

飼料用トウモロコシの収穫適期は、「黄熟期」です。これより早いと、でんぷんの蓄積が不十分であったり、栄養が排汁とともに流出したりします。また、黄熟期より遅れると、消化率が低下するほか、水分が下がりすぎて発酵品質が低下しやすくなります。

黄熟期の判定は、「ミルクライン」による方法が簡単です。

トウモロコシの雌穂(実)の中程を折って子実の断面を見ると、黄色い部分と乳白色の部分に分かれています。この境目を「ミルクライン」と言い、熟度が進むにつれて子実の外側から中心に向かって、黄色い部分が増えていきます。収穫適期である黄熟期は、ミルクラインが子実の外側から40~59%に達した頃です。

なお、破碎処理を行う場合、消化率の改善が図られるので、収穫期を後にずらすことが可能です。



2 サイレージ調製

(1) 細断

ア 詰め込み密度、反芻時間、子実の消化性の兼ね合いから、破碎処理を行わない場合で切断長 1cm 程度、破碎処理を行う場合は、切断長 19mm、ローラー間隙 5mm に調整しましょう。黄熟後期以降は、消化率をあげるためローラー幅を 2-3mm に調整します。

イ 目的のサイズで細断できるよう、ハーベスタの刃の研磨や調整を行いましょう。

(2) サイロの大きさ

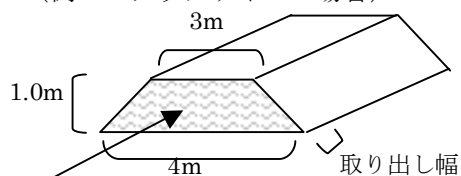
二次発酵を防ぐために、下表の取り出し幅以上のサイレージを1日で取り出せるよう、サイレージの利用量に応じてサイロの大きさを決めましょう。

表 気候別の1日あたりのサイレージ取り出し幅

サイロの種類	暑いとき	寒いとき
バンカーサイロ	30cm以上	20cm以上
スタックサイロ	45cm以上	30cm以上

【図 サイロのサイズ設計例】

(例：スタックサイロの場合)



$$\text{断面積} \left[\frac{(\text{上底} + \text{下底}) \times \text{高さ} \times 1/2}{\right]} \\ = \frac{(3+4) \times 1.0 \times 1/2}{=} 3.5\text{m}^2$$

サイロの大きさ(断面積)の計算

断面積 = 1日の使用量 ÷ 現物密度 ÷ 取り出し幅

例) 1日の必要取り出し量：現物 1000kg (50頭 × 20kg/日)

現物密度：600kg/m³ (スタックサイロ)

取り出し幅 45cm (スタックサイロ)

断面積 = 1000 ÷ 600 ÷ 0.45 = 3.7 m² 以下

この場合、上底 3m、下底 4m、高さ 1m のスタックサイロで

適正な断面積 (3.5 m²) が確保できます。

(3) 詰め込み・踏圧

ア 十分な踏圧を行うため、踏圧作業のペースに合わせて、詰め込み原料の収穫、運搬ペースを調整します。

イ 土砂の混入を避けるため、運搬トラックはサイロの奥まで入らず、サイロの手前で詰め込み原料を下ろします。フロントローダー等を用いて、サイロ全体に薄く広げ、速やかに踏圧を行います。

ウ サイロの壁沿いや角などの重機では踏圧できない場所は、人の足で踏圧して下さい。人が歩いても足跡が残らない程度まで十分に踏み込みましょう。

(4) 密封

ア 変敗の原因となる好気性微生物の増殖を抑えるためには、詰め込み作業後速やかにサイロビニールやスタックシートなどで密封し、風でシートが浮かないよう、廃タイヤ等でおもしをします。

イ 詰め込み作業は1日で終了させるのが理想です。やむを得ず2日に渡る時は、1日目の作業終了時にギ酸を散布して仮被覆します。また、気密性のサイロではガスによる酸欠事故の恐れがありますので、十分に換気してから2日目の作業を始めてください。

ウ 刈り遅れや霜にあたったトウモロコシは、水分が低く、二次発酵しやすくなります。プロピオン酸・ギ酸などの添加剤の使用を検討しましょう。

2 家畜の暑熱対策

暑さが続いています。8月に入ってからは高温で推移しており、これから体力低下による影響が強く出てくるのが懸念されます。暑熱の影響を緩和する対策を継続するとともに、低下した体力の回復に努めましょう。

(1) 環境温度の低下対策

ア 屋根に断熱材が入っていない場合には、屋根への散水、ドロマイト石灰や遮光塗料の塗布も有効です。

イ 遮光ネット等の設置により、畜舎内への直射日光が差し込まないようにしましょう。特に西日に注意をしてください。

ウ 畜舎の窓や戸を開放するなど、換気と通気を確保します。

エ 換気扇、ダクトファン、扇風機等により、牛体に送風します。設置済みの方も、風がきちんと牛に当たっていることを確認しましょう。熱放散の大きい頸部や肩に風を当てるとより効果的です。

(2) 飼料給与の留意点

ア 新鮮な水が常に飲めるようにします。

イ 採食量の確保に努めます。粗飼料は、適期収穫の牧草など、嗜好性が良く良質なものをできるだけ給与しましょう。また、夜間から早朝の涼しい時間帯に給与する、給与回数を増やすなども効果的です。

ウ 配合飼料の給与量の多い搾乳牛では、重曹を1頭1日あたり100～200g給与するとアシドーシス予防に有効です。

次号は9月26日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。